

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ **みろく自然公園周辺を訪ねる**

講 師 松田 朝由（大川広域行政組合 埋蔵文化財係）

日 時 平成30年5月27日（日）



共 催

高松市歴史民俗協会

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

1 富田茶臼山古墳

さぬき市大川町富田中

墳形 前方後円墳

築造時期 古墳時代中期初頭（五世紀初頭）

全長 一三九メートル

出土品 円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪

◆ 四国最大の古墳

古墳時代前期後半に津田湾の沿岸部に代々築造された津田古墳群が終焉を迎えた時、入れ替わるかのように内陸の大川町に古墳時代中期初頭に出現したのが富田茶臼山古墳でした。全長一三九メートルの四国で最大の古墳になります。四国最大の古墳が高松市でも坂出市でもなくさぬき市にあるのは、富田茶臼山古墳の前段階に築造された津田古墳群の存在を抜きにしては考えられません。津田古墳群は前期後半から外部地域との密接なネットワークを背景に古墳の特徴に脱地元色が見られましたが、富田茶臼山古墳も同様に古墳の特徴に脱地元色が見られます。そして富田茶臼山古墳の脱地元色は津田古墳群よりも発展し、畿内地域の巨大古墳と比較して遜色のないものになりました。富田茶臼山古墳は畿内

地域の巨大古墳によく似ています。重要な共通点として三点を挙げることができます。一点目は三段に古墳が造られていること、二点目は空から見ると盾の形をした周濠が見られること、そして三点目は古墳本体の周辺に陪塚が築造されていることです。

◆ 三段に築かれた古墳

富田茶臼山古墳の外見は古墳築造後の様々な改変によって崖になったり平坦地になったりしています。江戸時代の文政十一年（一八二八）に中山城山が著した「全讃史」には茶臼山城として記述されています。富田茶臼山古墳が城跡として再利用されていたとすればこの時の改変が少なからずあったと思われる。また、近年まで墳丘上は畑や宅地になっていたようで長い年月の間に墳丘の改変は繰り返されたと考えられます。このように後世の改変が多く見られますが、それでも古墳全体を見渡した時に三段に構築されている点は容易に観察できます。後円部は一段目と二段目の高さはそれぞれ約三メートルで三段目は約九メートルになっています。前方部も一段目と二段目は高さ約三メートルで三段目は約六メートルになっています。また、段の平坦地は幅約三メートルで古墳を巡っています。前方後円墳の形は前方部が先端に向かって直線的に広がっており、前方部の幅よりも後円部の直径は少し大きくなっています。高さは後円部の方が約三メートル高く、広大な前方部

の上に立つと上方に後円部の頂上が見えます。後円部の高さが一五・七メートル、前方部の高さが一一・八メートルになります。

さて、香川県内の古墳は段がないか二段になっている例がほとんどです。津田古墳群で段の明らかにあった一つ山古墳は二段でした。

一方、畿内地域の大型の前方後円墳は三段に築造されています。都出比呂志氏は三段築成の原理があり、中国思想の影響があったと指摘しています。富田茶臼山古墳が香川県内で事例の少ない三段築成の原理で築造されている点に畿内地域との関わりが窺えます。



北西(上写真)と南(下写真)から見た墳丘

◆ 盾形の周濠と周庭帯

空中写真には富田茶臼山古墳の盾形の周濠の痕跡が見事に写っています。また、前方後円墳から南西のあぜ道に立つと周濠の様子がよく分かります。同時に富田茶臼山古墳がどのようにして築造されたかが分かります。

あぜ道から見ると北側に古墳があり、南側には上方に道の駅があります。道の駅から北にかけては畑が段々に下っており古墳の手前で大きく落ち込みます。この部分が周濠になります。この深く落ち込んだ周濠の両岸に注目して下さい。北側の岸は古墳の基底部を走るあぜ道の上の段で前方後円墳形の墳丘になります。この一段目上面の高さと南側の岸の高さを比べるとだいたい同じ高さであることが分かります。

また、周濠の南側の岸の上面は南に一五メートルの地点まで水平になっています。平成元年（一九八九）に発掘調査を担当した國木健司氏はこの部分までが周庭帯であると指摘されました。周庭帯とは古墳として整形された範囲で周濠を取り巻く堤と考えられています。周濠の南の岸から幅一五メートル南までが古墳として整形された範囲というわけです。この地点から南は急傾斜で一段高くなっています。古墳が築造される前の自然地形は周庭帯の部分から墳丘の一段目の平坦地にかけてゆるやかに下っていたものを、古墳を切り離すために掘削した部分が南側の周濠や周庭帯になります。



平成 20 年の空中写真（左が北） 日本地図センター

そして一段目の平坦地は前方後円形に削り出され、周濠・周庭帯の掘削や墳丘の整形で生じた土を利用して二段目以上の墳丘が盛土されたと考えられています。濠の底は南と北では三メートル程度の高低差がありますが、一段目上面の平坦地では南北の高低差は一メートル以内と小さくなっており、一段目上面の平坦地で水平に調整しているのが分かります。ですから一段目の平坦地は墳丘の土台と評価することもできます。

周濠の外形ラインは後円部東側の階段手前から南を見ても実感することができます。北側は古墳の横を走っている道路の北に細道が後円部に並行して円形に巡っています。この細道の部分が周濠の岸になります。そして、この小道から外側でも平行して地形が巡っており、この部分が周庭帯とされています。周濠内を発掘調査すると、水がたまっていたことを示す灰色をした粘土が堆積していたようです。今は周濠に水は見られませんが、かつては大阪府や奈良県の巨大古墳のように水が溜まり、池のようになっていた可能性があります。

◆ 陪塚の発見

平成五年（一九九三）七月二六日に富田茶臼山古墳は国指定史跡になりました。そのわずか四か月後の十二月一日に前方部の西側で陪塚の溝が発見されました。発見された陪塚

は後に一号陪塚と呼称されるようになります。続く平成六年一〇月一二日に二号陪塚、三号陪塚がたて続けに前方部の西側から発見され、三基の陪塚が明らかになってきました。

陪塚とは大型の古墳である主墳に隣接する小古墳で、奈良県や大阪府の巨大古墳でよく見られます。例えば大山古墳の周辺を歩くと点々と陪塚に行き当たります。陪は主従関係の従の意味があり、主人に従って葬られることを陪葬といっています。そして陪葬のための墓を陪塚と呼びますが、日本の古墳の場合、全てか陪葬というわけではないようです。例えば大阪府にある全長二二五メートルの墓山古墳の陪塚である西墓山古墳からは墳頂部に人体を埋葬した痕跡がなく、多量の鉄器が東西二列に分かれて埋納されており、墓ではなく鉄器埋納施設の可能性が考えられています。

富田茶臼山古墳の陪塚は三基ともに方墳と考えられています。平成五年まで発見されなかったのは上面が完全に削平され墳丘の形を留めていなかったからです。開発に伴う発掘調査によって偶然発見されたのでした。ですから、一般的に墳頂部に設けられる埋葬施設や埋納施設は削平されていると考えられ陪塚の性格は不明です。ただ、下部構造は地下に残されており、二号陪塚では富田茶臼山古墳の本体と同じように墳丘斜面には葺石が積み、墳丘上には円筒埴輪が巡らされていました。

三基の陪塚の配列は計画的で、一号陪塚の西辺を北側に延長した地点が二号陪塚の東辺になり、また、二号陪塚の西側ラインを北側に延長した地点が三号陪塚の東辺になっています。富田茶臼山古墳の西側は周庭帯の様子を地形から読み解くことが難しいのですが、今後も計画的に配置された富田茶臼山古墳の遺構が発掘調査によって明らかにされる可能性は十分に考えられます。

富田茶臼山古墳のように陪塚を伴う古墳は地方では少なく、香川県内では他に例がありません。陪塚が発見されたことにより富田茶臼山古墳の重要な畿内的な特徴が明らかになったといえます。

◆墳丘に巡らされた多量の埴輪

富田茶臼山古墳には千壺山の別名があつたようですが、この名称が物語るように墳丘にはたくさんの壺ならぬ埴輪が巡らされていました。後円部東の一段目の平坦地の発掘調査



2号陪塚の埴石と埴輪列

では平坦地の端付近に円筒埴輪が隙間なく並べられているのが発見されました。円筒埴輪は直径三二〜三七センチメートルの穴を掘って下端付近を固定していました。円筒埴輪のほとんどは長い年月の間に破片となり、埋没した円筒埴輪の下端付近のみが残されていたのです。このように元のままの状態にあるのは一部にすぎませんが、例えば下端付近のみでも残されていたことによって大きな情報を得ることができました。

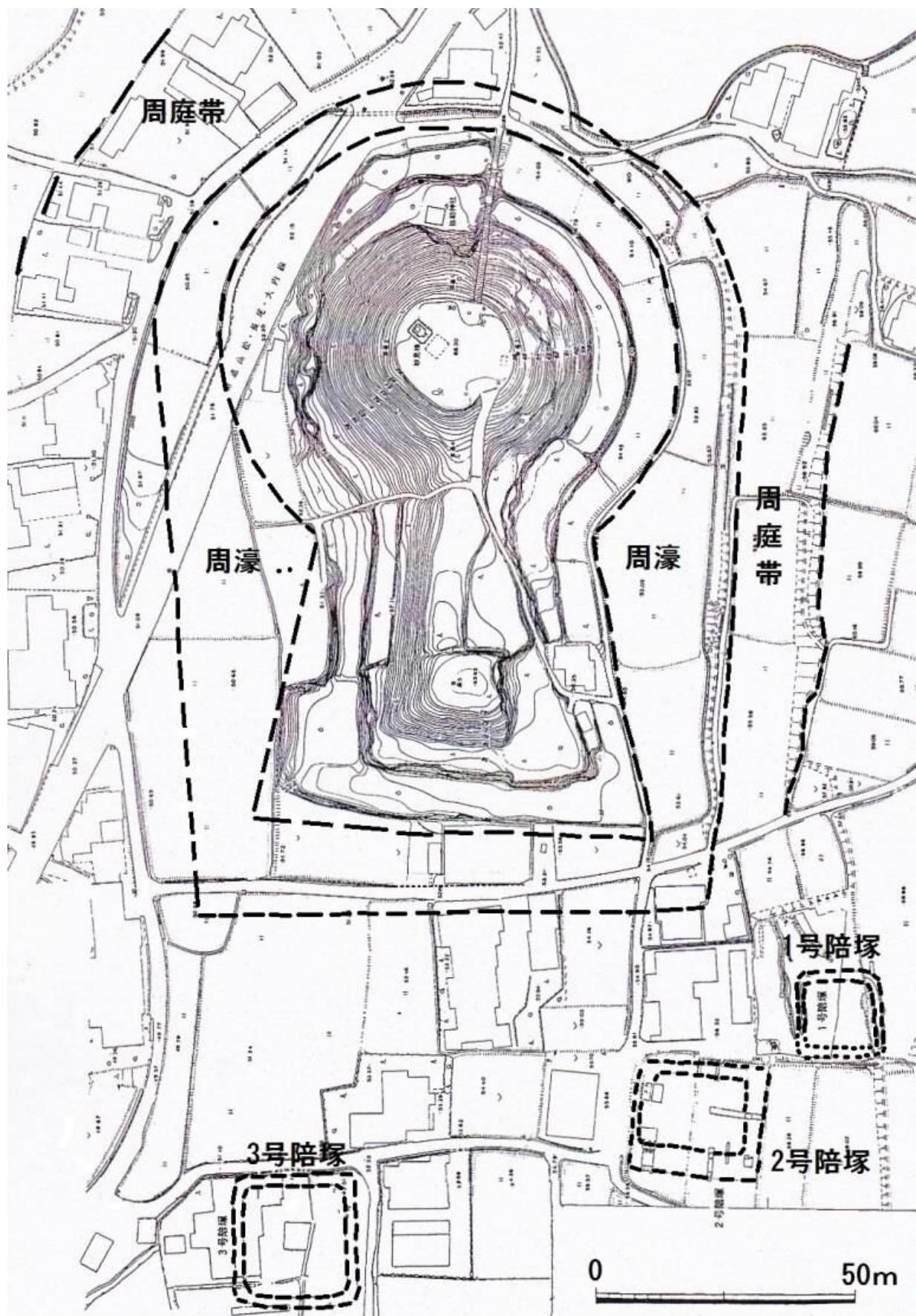
発掘調査で発見された円筒埴輪の並びは五個体分ですが、五個体発見されると元々墳丘にどの程度の埴輪が使用されていたのかが予測できます。円筒埴輪の底の直径は二二センチメートル前後で隙間なく巡らすと二メートル間には六本程度の使用が計算できます。同



後円部東側で発見された埴輪列

じような状態で各段の平坦地に三重に巡らされていたとすれば、使用された埴輪数は二六〇〇〜二九〇〇本になります。さらには墳頂部に形象埴輪が立てられていたとすれば埴輪の総数は三〇〇〇本近くが想定できます。富田茶臼山古墳の造営は山を削って土を盛り上げて墳丘を構築するだけではなく、大規模な埴輪作りがあつたことが分かります。埴輪を製作するには燃料となる木材や粘土が必要です。造営に占める労力は決して少ないものではありません。並んだ状態の円筒埴輪の発見は古墳に費やされた労力を想定していく上でも重要な発見でした。

発掘調査では後円部や前方部の複数箇所を実施しそれぞれの調査区で円筒埴輪が出土しています。調査区ごとの円筒埴輪を比較すると場所によって埴輪の色や質が異なっており、多くの人々が分担して製作していたことが分かります。



富田茶臼山古墳の墳丘と陪塚 (縮尺 1/2000) ※左が北

円筒埴輪から判明することとして、古墳の構造の他に築造時期や古墳間の関係があります。富田茶臼山古墳の円筒埴輪には外面に一部黒くなった部分が見られます。こうした痕跡は野焼きをしていた証拠になります。窯で焼成をすると見られませんが。窯は渡来系の人々によって伝えられましたので富田茶臼山古墳の円筒埴輪は渡来人が伝えた頃よりも前ということになります。

一方、円筒埴輪の胴部には透孔と呼ばれる孔が見られますが、初期の円筒埴輪では三角形や方形など様々な形が見られます。津田町の岩崎山四号墳では様々な形があり凸形かL字形の珍しいものもありました。古墳時代中期頃になるとこの透孔は円



富田茶臼山古墳の円筒埴輪

形に固定されていきます。富田茶臼山古墳の円筒埴輪は全て円形になっています。年代を示す特徴から富田茶臼山古墳の円筒埴輪は古墳時代中期初頭という製作年代が導き出され、円筒埴輪以外の要素も同時に検討して古墳の年代が確定しているのです。

円筒埴輪から古墳間の関係も判明します。津田古墳群では鶴羽・相地グループと津田・羽立グループを跨いで円筒埴輪が共通していました。赤山古墳と岩崎山四号墳、けぼ山古墳と龍王山古墳で類似していました。

一方、赤山古墳とけぼ山古墳、岩崎山四号墳と龍王山古墳は同じグループですが、埴輪の特徴は大きく異なりました。同じグループを越えて類似しているのは世代ごとに同一の埴輪工人が両グループの埴輪製作に携ったからで、同じグループで埴輪の特徴が大きく異なっているのは円筒埴輪生産が世代ごとに変容し継続性を持たなかったからと考えられます。津田古墳群は二つのグループに分かれますが、決して二つのグループは独自に存在していたのではなく、互いに深く関連していたことを円筒埴輪は教えてくれます。

古墳相互の関係として注目したいのはやはり津田古墳群と富田茶臼山古墳の関係です。富田茶臼山古墳に年代的に近い龍王山古墳とけぼ山古墳の円筒埴輪は突帯の形や口縁部の形には共通点が見られ、年代が近いことを窺わせます。

ただ、土質や焼成の状況を見る限り相違点が目立ちます。例えば龍王山古墳やけぼ山

古墳の円筒埴輪に目立つ赤色の粒は富田茶臼山古墳ではほとんど見られませんし、同じ色に焼成された事例は富田茶臼山古墳には見られません。また、龍王山古墳やけぼ山古墳では地元の伝統的な手法で製作された壺形埴輪が見りましたが、これも富田茶臼山古墳では発見されていません。結論として現状では津田古墳群と富田茶臼山古墳からは類似した埴輪が発見されていないといえます。

埴輪の特徴が違ふということは津田古墳群から富田茶臼山古墳への発展を語る時に重要な要素になる可能性はありますが、富田茶臼山古墳で明らかになっている円筒埴輪は一握りですので今後の調査の進展に課題として残しておきたいと思います。

最後に時期差のある岩崎山四号墳と富田茶臼山古墳の円筒埴輪を比較してみようと思います。なぜ注目するかといえば、二つの円筒埴輪を並べると多くの方は予想外な反応をされると思ったからです。目の前で比較すればおそらくほとんどの人が岩崎山四号墳の円筒埴輪の方が立派だと思われると思います。一つ一つが丁寧に製作され、大きさも岩崎山四号墳の方が大きいからです。古墳の大きさと埴輪のよさは別物ということが分かります。

なぜ岩崎山四号の円筒埴輪の方が立派かというと、岩崎山四号墳の円筒埴輪の方が古いため、丁寧に製作されているからです。円筒埴輪の変遷は新しくなるにつれて形が形骸化していきます。これは円筒埴輪に限らず様々な遺物に共通していますが、形骸化していく

形の変化を把握することが年代を推定していく上で重要なのです。円筒埴輪の特徴を細かく観察していくと岩崎山四号墳から龍王山古墳、そして富田茶臼山古墳と確実に形骸化が進行しているのが分かります。形骸化が進行するということは一個の円筒埴輪の製作に費やされる時間や労力が減少しているということになります。富田茶臼山古墳では三〇〇〇本もの埴輪を必要としたのですから、一つ一つの埴輪の製作に時間をかけていられないと考えれば何となく納得できるような気がします。

◆ 明らかになつていない埋葬施設

富田茶臼山古墳の後円部の頂部に行くと広さに驚きます。上面は平坦になっています。現在墳丘上には妙見宮が祀られています。灯籠や鳥居に文久三年（一八六三）の年号が刻まれており、文政十一年（一八二八）の『全讃史』には祠があると書かれています。また、後円部頂部には破損の著しい豊島石の灯籠が見られ、神社としての歴史はさらに古いと想像されます。妙見宮の存在は過去に掘削された可能性を窺わせますが記録は残されておらず、事実是不明です。また、昭和五三年（一九七八）の『大川町史』では明治年間に土俵を作ろうとしたが石にあたり少し掘ったが腹痛をおこしたので中止したという伝承が記載されています。

埋葬施設の内容を想像してみよう。まず竪穴式石室が構築されていることはほぼ確実と思われます。津田古墳群からの発展を考えると竪穴式石室の長軸は南北方向に設けられている可能性があります。石室の中には石棺があると予測できます。津田古墳群の首長墓も代々刳拔式石棺を使用していたからです。ここで問題となるのは石棺の種類です。畿内地域の巨大古墳の特徴が見られるのであれば、畿内地域の巨大古墳は兵庫県高砂市の凝灰岩である竜山石で製作した長持形石棺を使用しており、富田茶臼山古墳も同様の可能性があります。ただ、富田茶臼山古墳の真北に見えるのが火山になります。津田古墳群からの伝統を継承しているのであれば火山石の刳拔式石棺が使用されているのかもしれませんが。もしくは時代を考慮すれば火山石の長持形石棺の可能性も推測されます。

◆ 交通の要所に造られた古墳

これまで見てきたように富田茶臼山古墳は様々な特徴に畿内地域の巨大古墳との共通点が見られました。この古墳が奈良県や大阪府にあっても違和感がないほど畿内的な特徴をもつ古墳と言えます。ここであえて富田茶臼山古墳の個性を挙げるとすれば自然地形の利用の仕方が指摘できます。畿内地域の巨大古墳だけでなく、津田古墳群をはじめとする香川県内の地元の古墳もそうですが、前方後円墳の多くは尾根の主軸をそのまま前方後円墳

の主軸にしています。岩崎山四号墳やけば山古墳は尾根の主軸を前方後円墳の形に整形し、溝によって古墳を自然地形から切り離していました。

それに対して富田茶臼山古墳は南から下ってくる丘陵に対して直交して墳丘を築造しています。丘陵から周濠で切り離したのは後円部や前方部の先端ではなく、古墳の側面だったのです。このような多くの前方後円墳と異なる成形を行なったのには理由がありました。それは麓から古墳の側面を見せようとしたからでした。

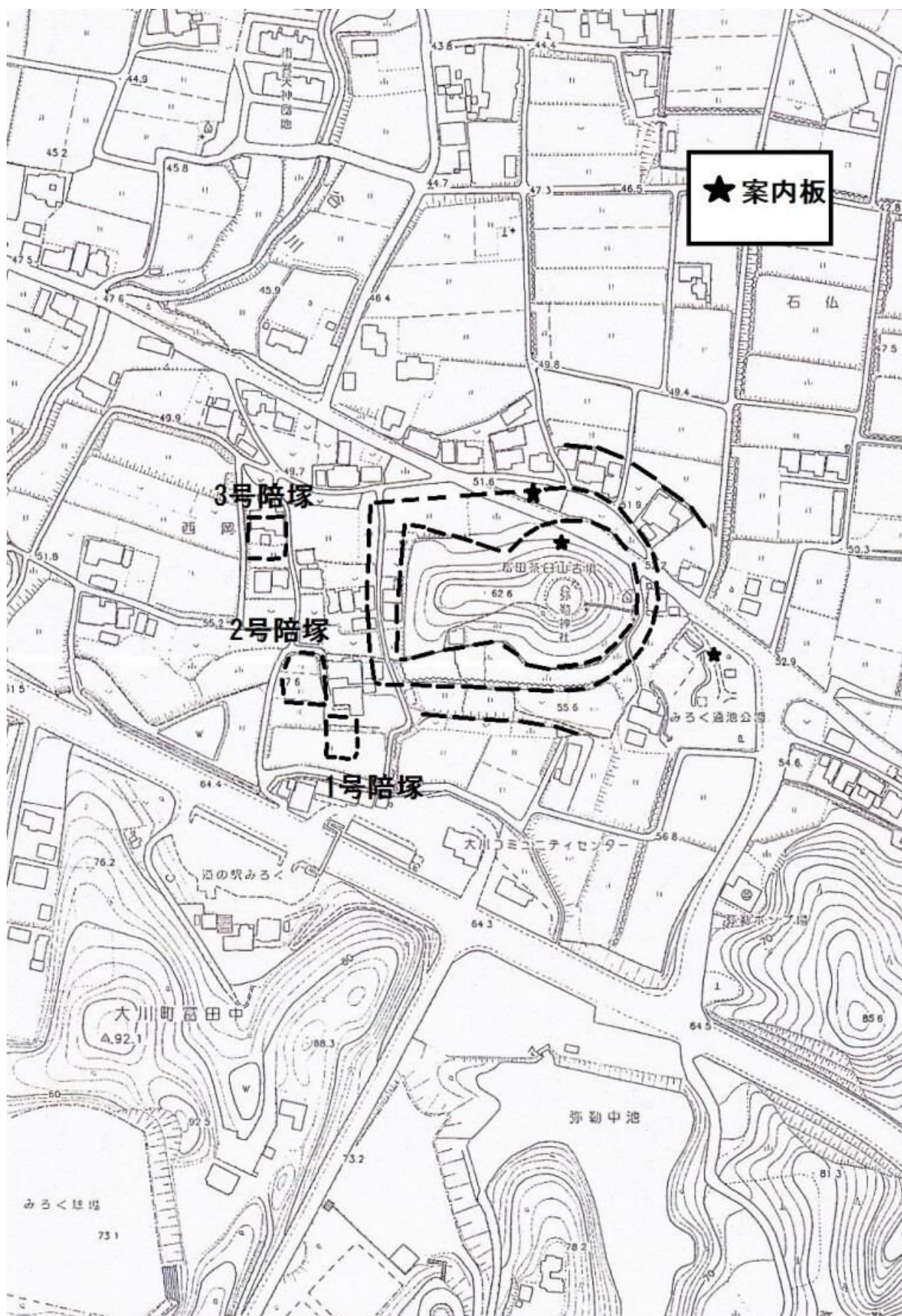
富田茶臼古墳が築造されて約二五〇〜三〇〇年後、古墳の北側には東西に走る幹線道路が建設されました。北海道です。北海道から富田茶臼山古墳は側面形が美しく見えたと思われます。麓の経路からの眺望は津田古墳群から一貫して意識されてきたことですか、津田古墳群の首長墓は沿岸部から内陸に至る経路からの視覚を意識して築造されたのに対して、富田茶臼山古墳は内陸の道を東西に走る道を意識して築造された可能性があります。

北海道は古墳時代から後の飛鳥時代以降に建設されましたが、古墳時代にも北海道の全身的な幹線道路が東西に走っていた可能性が推測されます。富田茶臼山古墳の立地している場所は高松平野から続く広い平地の一番東の端になります。ここから東に行くには山を越える必要があります。逆に東から訪れる人々にとっては玄関口になります。こうした交通の要所に支配領域のシンボルとして富田茶臼山古墳は築造されたと考えられます。

津田古墳群が沿岸部から内陸の経路上に築造されたのに対して富田茶臼山古墳が内陸を抜ける経路沿いに築造されたということは、時代が海路を意識していた時代から内陸を意識した時代に大きく変換していった可能性があります。さぬき市内に分布する古墳の展開を見ると、古墳時代前期までは津田古墳群など沿岸部に多く見られますが、古墳時代後期になると沿岸部にはほとんど見られなくなります。

一方、南海道より南の平野と丘陵部の境付近に古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が数多く築造されるようになります。こうした大きな歴史的な流れの中での変容のきっかけとなったのが富田茶臼山古墳の築造であつたかもしれません。

富田茶臼山古墳の出現は他地域に先駆けて外部地域とのネットワークを形成した津田古墳群の到達点でありました。四国最大の古墳がこの地に出現した背景には古墳時代前期を通じて発展してきた津田古墳群の首長たちの活躍があつたのでした。



富田茶臼山古墳と周辺の地形（縮尺 1/6000）

2 旧恵利家住宅

◆ 香川県最古級の古民家

旧恵利家住宅はもともと大川町新名にありました。昭和三〇年代後半頃より文化財的な価値が注目されるようになり、昭和四二年（一九六七）に大川町に寄贈され、昭和四五年に大川ダム東岸に移築されました。その後、平成一三年に現在地に再度移転されました。

旧恵利家住宅に居住していたのは恵利家ですが、恵利家は安政年間（一八五四〜六〇）頃に藻玉家の家屋を取得したようです。藻玉家は長百姓で初代は元禄一二年（一六九九）に没しています。

建物の特徴に注目すると、土間とヒロマの境が解放され、ザシキとナンドの境は壁で閉ざされています。また、ナンドの出入口が狭く外壁は壁で閉ざされて閉鎖的です。さらに用材は一樣に細く均斉がとれていま



さぬき市大川町富田中

す。こうした特徴は古風な手法であり、昭和四五年に移転工事を指導した浅野清氏は一七世紀に遡るとみて無理がないように思われると判断されました。初代の没年から推測して一七世紀後半の香川県最古級の古民家と考えられます。

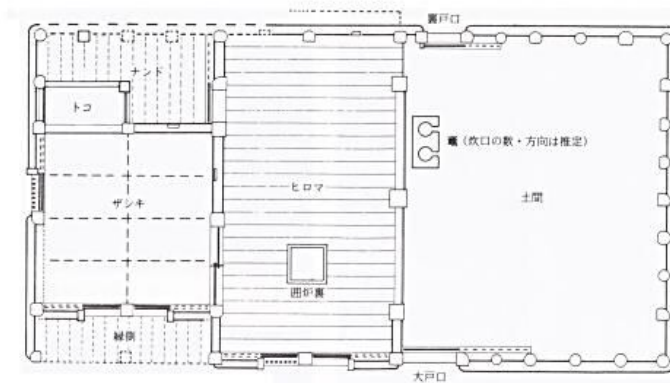
◆ 建物の特徴

住宅は桁行七間（二三・八六メートル）、梁間四間（七・九二メートル）で背面にツノヤが突出しているのが特徴です。このツノヤは創建当初のものではなく、後にナンドが拡張されたものと考えられています。屋根は寄棟造りの茅葺の建物で「ツクダレ」「ツダレ」と呼ばれる型式になります。棟には煙出しが見られます。

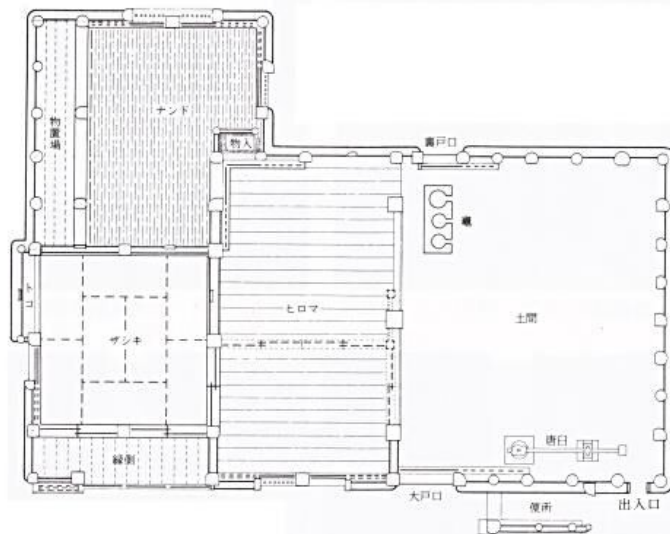
平面形は土間が広く桁行七間中三間が土間になります。土間には唐臼と藁打石が据えられています。土間の横の二間分は板敷のヒロマになります。そして西端の二間は前後に二分して南側をザシキ、北側をナンドに区画しています。こうした間取りは広間型三間間取り形式であり、東北地方から中国地方にかけて最も広く分布する建物形式になります。天井は丸竹をつづらで編んだうえに藁を敷き詰め、その上に土を塗り付けた大和天井と呼ばれるものです。柱は主に栗が使用され、大黒柱の下方には綱とりによって摩耗した痕跡が見られます。



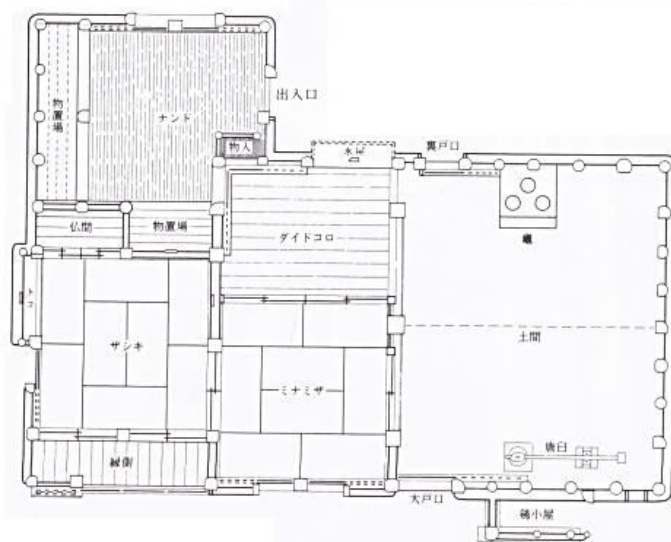
- ・ 元々の旧恵利家住宅 (写真上)
- ・ 昭和45年に大川ダムに移転した頃の旧恵利家住宅 (写真下)



今回の調査から想定される当初平面



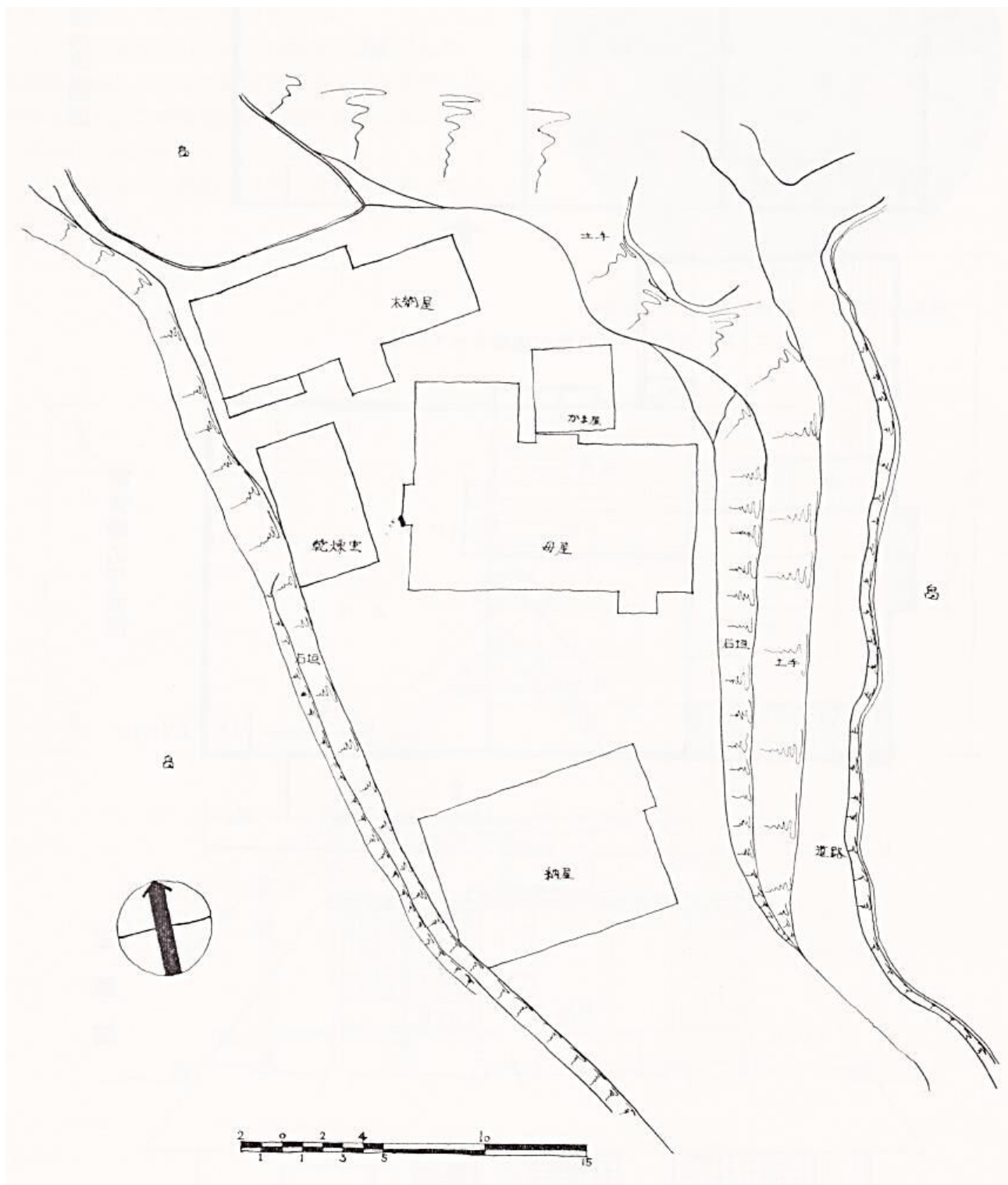
今回の調査から想定されるツノヤ増築時平面



昭和45年工事前平面

(『恵利旧宅』所収平面に今回の調査結果を加筆)

旧恵利家住宅の平面形



大川町新名に所在した頃の旧恵利家住宅の建物配置

参考文献

- 大川町 一九七〇『県下最古の農家恵利旧宅』
- 大川町教育委員会 一九九〇『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』
- 大川町 二〇〇一『重要文化財旧恵利家住宅保存修理工事（移築）報告書』
- さぬき市教育委員会 二〇一三『津田古墳群調査報告書』
- さぬき市教育委員会 二〇一五『津田古墳群と富田茶臼山古墳をあるく』

5月27日（日）

◎行き 大川バス引田線

高松駅(7:30)⇒瓦町(7:39)⇒みろく公園前(8:23)

◎帰り 大川バス引田線

みろく公園前(13:41)⇒瓦町(14:24)⇒高松駅(14:35)

★次回のふるさと探訪は…

テ ー マ 「木太町海中散歩～古・高松湾を巡る～」

と き 平成30年6月24日（日）9：30～正午頃

集合場所 ことでん林道駅

講 師 高上 拓（市文化財専門員）

参 加 費 無料

☆広報「たかまつ」6月15日号に開催案内を掲載します。

☆ふるさと探訪用駐車場はありません。公共交通機関を御利用ください。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。

（電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。）



「ふるさと探訪」に参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。

